## 「日本の法制度・法文化」と「東京奠都百四十年」

企画·編集委員 武 田 秀 章

問題意識に発するものであった。

『明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、『明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、『明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、『明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、『明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、『明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、『明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、『明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、『明治聖徳記念学会紀要』は、復刊第四十三号以来、毎年一回、『明治聖徳記念学会紀要』は、『明治聖徳記念学会紀要』は、『明治聖徳記念学会紀書』は、『明治聖徳記念学会紀書』に発見されている。

十年」と定め、あらためてその意義を問い直すこととした。 おたかも本年(平成二十一年)は、大日本帝国憲法発布からあたかも本年(平成二十一年)は、大日本帝国憲法発布からあたかも本年(平成二十一年)は、大日本帝国憲法発布からあたかも本年(平成二十一年)は、大日本帝国憲法発布からあたかも本年(平成二十一年)は、大日本帝国憲法発布からあたかも本年(平成二十一年)は、大日本帝国憲法発布からあたかも本年(平成二十一年)は、大日本帝国憲法発布からあたかも本年(平成二十一年)は、大日本帝国憲法発布からあたかも本年(平成二十一年)は、大日本帝国憲法発布から

ウム「日本の法制度と神道文化」の講演・討議を収録した。こウム「日本の法制度と神道文化」の講演・討議を収録した。いずれ法文化の諸相を明らかにする七篇の論稿が寄せられた。いずれま文化の諸相を明らかにする七篇の論稿が寄せられた。いずれま文化の諸相を明らかにする七篇の論稿が寄せられた。いずれま文化の諸相を明らかにする七篇の論稿が寄せられた。いずれま文化の諸相を明らかにする七篇の論稿が寄せられた。いずれま文化の諸相を明らかにする七篇の論稿が寄せられた。いずれま文化の諸相を明らかにするかを慎重に呼味した先人の姿が中、わが国した。この、わが国制への探求の積み重ねが控えている。

文化研究・神道文化研究の「現在」を示す興味深いメッセー う。さらには三篇の随想、 郷」を知る上においても、 とりわけ堀口修氏による東郷平八郎日記の紹介は、「素顔の を示す貴重な資料を公にしている。いずれの史料も興味深いが、 かけなくなったような気がするのは、当方の僻目であろうか。 このところ若手にふさわしい野心的・挑戦的な論文を久しく見 掲載した。うち三篇が若手研究者の論文である。それにしても 化が培われていった過程を窺わせるところがあると言えよう。 東京奠都・東京行幸以降、それまでの江戸文化とはまた異なっ その周辺の課題を巡る三篇の論文を掲載した。いずれの論稿も れは現代の神道史研究をリードしてきた両碩学が、 た独自の東京文化―近代の皇室を背景とした都市文化・近郊文 合った稀有な記録である。 のごとく貫く「何ものか」の本質を巡って、胸襟を開いて語 巻末掲載の三篇の史料紹介もまた、近代史の秘められた動向 特集テーマ以外の題材を扱った論文としては、四篇の論稿を 特集(2)「東京奠都百四十年」においては、東京奠都及び きわめて意義深い史料紹介と言えよ 特集論文とともにぜひ味読願いたい。 九篇の書評・紹介も、それぞれ明治

研究の新たな展望を切り拓いてゆくことを祈念したい。

研究の新たな展望を切り拓いてゆくことを祈念したい。

研究の新たな展望を切り拓いてゆくことを祈念したい。

研究のが伴ってこそのボリュームでなければならないならない。内容が伴ってこそのボリュームでなければならないならない。内容が伴ってこそのボリュームであればならないがリューム値達成のみが自己目的化するようなことがあってはばち切れんばかりのボリュームを誇ることとなった。もちろんはち切れんばかりのボリュームを誇ることを祈念したい。

を伝えている。

(國學院大學神道文化学部教授)